

飛耳長目

森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻124号 平成26年3月1日発行

「修身教授録」探求 (第八十九回)

身代わり

森 信 三

はじめに一言申しにくいことを申し上げますが、授業の始まる前にあまり大声で雑談をするものではありません。二三の心ない人々のために、教室全体の空気がそれだけ淀むのです。ことに礼が済んでから話をするなどという事は言語道断のことです。その程度の心構えでは、人間何十年学ぼうとも一毫も自己に増益するものはないでしょう。元来教室というものは空気がスーッと澄み切つてないといけません。それだけでも教育の半ばはできたというものです。

なおついでに昨日のことについて申し上げますが、遠足の日に遅刻するなどということは実に言語道断です。よし平常は遅刻する場合があつたとしても、あアいう時には真つ先駆けて来るようではなくては駄目です。人間というものは「いぎ」という時には何物をおいても真つ先駆けて先頭一番乗りをやるだけの心の弾力がなくじゃダメです。これは諸君の生涯のお守り札です。もし万一遅れそうになつたら、たとえ生徒といえども自動車飛ばしてでも駆けつけるというぐらいの心の張りがないとダメです。これはひとり現在だけについていうものではありません。いや、世の中へ出れば出るほどそうです。大事な公用の場合遅れそうになつたら、たとえ自腹を切つても自動車で馳せつけるぐらいの心の弾力のない人間にはとても大事などできません。

ついでにもう一つ申しておきます。諸君が将来生徒を連れて遠足などに行つたような場合、生徒より先に腰をかけるという事は、教師としての嗜みではありません。特に担任が尋常(小学)の下級生というような場合にはそうです。生徒は皆腰をかけても、先生一人ちゃんとして腰掛けないでいる姿は、いかにも凜然としてそこに教育者としての権威が感じられるものです。これも教師としての一つの嗜みというものです。

■自分の「身代わり」を育てる

さて今日は「身代わり」という題を掲げましたが、実はこういう角度から真実の教育というものを考えてみたいと思うのです。そこで最初にまず結論を申せば、教育というものはある意味では自分の「身代わり」をつくることだと言つても良いでしょう。すなわち我々人間はそういつまでも生き長らえることのできるものではなく、時来たれば人は皆死ぬものである。その時我々の肉体的生命を伝えるものは言うまでもなく我が子でありますが、精神を受け継ぐ者は、多くの場合我が子でなくして弟子のようであります。もし我が子にして精神的なもののまでも受け継ぐことができたとしたら、親としてこれほど喜ばしい事はなく、また子としても親の志を継承するということほど大なる孝はないと言えましょう。しかしな

がら世の多くの場合は、直接親から学ぶことよりも真に尊敬する先生によつて教えられることの方が多く、かつ深いのが常であります。すなわち親子の間柄などというものは、そのあまりの親しさの故に却つて心甘えて、たとえ同様の教訓を聞いたとしても、これを親の口から聞いた場合には、先生から聞く程に心に染みることの少ないのが通例と申してよいでしょう。

■真師と弟子

そこで親は我が肉体を生み給えるものとすれば、真の正師はまさに我が魂を生み給いし「魂の親」とも言えましょう。すなわち私どもは、両親によつてこの地上への第一の生誕を得るとともに、真師に巡り逢ふことによつてそこに第二の生誕すなわち魂の誕生を得るとも言えましょう。かかる次第でありますから、真の弟子というものは、自分の生涯をかけて先生の遺志を継承する者でなくてはなりません。この覚悟すなわち自分の生涯をかけて先生の精神を我が身に受け止め、さらにはこれを世の多くの人々に伝えんとする決心の打ち立たない間は、未だ以て真の弟子とはいえないのであります。またかくのごとくでない限り、真に道を学ぶ者とは言い得ないのであります。洵

に道というものはこのような生涯を期しての決心覚悟によつてのみ、初めて人より人へと伝わるものだからであります。

■我が精神の「継承者」を

かくして今これを教育者の立場より申せば、真実の教育とは自分のこの肉体の朽ち果てた後にもその精神を継承する者、すなわちわが「身代わり」となるものを造り出すこととも言えましょう。すなわち真の教育というものは、単にその時間々の教材を手際よく授けるという程度のことと済むものではなく、必ずやそこに精神を伝え、さらには道を伝えるという趣がなくてはならぬのであります。かく申す事はもちろん種々の教材を授けることを否定するものではありません。しかしそれらはどこまでもこの精神を伝え、道を伝えんがための手がかりであり方便なのであります。かくしてまた真の教育者というものは、常にその心の底に自分の死が見えていなくてはならぬとも言えましょう。

すなわち真の教育はひとりその一時間々で終わらぬはもとより、たとえ相手の学校卒業後5年10年の先を見透すといつても尚且つ充分とは言えないのであります。すなわち真の教育は、自分の肉体の朽ち果てた後、果たしてそこにわが精神

の継承者たり得る者を持つか否かというところまでゆかねばならぬとも言えましょう。

しかしながらここに注意を要する事は、かくのごとく自分の死後なおその生徒等に伝えられて生きる精神というものは、決して自分一人の我流の考えではできず、ことではありません。生徒に伝わって我が肉体の朽ち果てた後にもなお生きる精神は、単なる自分勝手に我流の考えではなく、実に自分が自分の先生より己を虚しくして受け得たところのものであります。かくして真実の教育にあつては、自分というものは単なる道の取り次ぎに過ぎないという虚しさがその根底になればならぬのであります。松陰先生の精神がその肉体の朽ち果てた後にもなお亡びないで永く後世に生きつつあるのは、先生の自覚においてはその教えらるるところ、ただ自分は「先師」山鹿素行先生の教えをお取り次ぎしているに過ぎないという虚しさを持つていられたからでありましょう。

かくして真実の教育というものは、教育者が自分の身代わりを造り出すということであり、換言すれば教育者がわが骨を拾ってくれる人間を生み出す努力とも言えましょう。従つてまたこれを学ぶ者の側から申せば、顧みて我が身は洵に至

らぬ者であるけれども、縁あつてこうした立派な先生の教えを受けた以上、先生に万一の事でもあつた際には、いささかたりともその精神を継承しその遺志を嗣ごうという決心を固めるといふ事でなくてはならない。

■「答礼」は「道」の授受

この点について私が今日の教育界で遺憾に思っている事が一つあります。それは一般に世の先生方の児童に対する答礼が概して粗末だといふことです。いたいたけな頑（こ）固（こ）な子供達が、道の傍（かた）から走り出でて丁寧（ていねい）に礼をするのに、うつかりすると帽子も取らずに顎（あご）でしゃくつて行かれる先生も少なくないようであります。これ教師自身が教育の本義について深く考えることがないからであります。すなわちそういう先生方には我が肉体の斃（め）れた後骨を拾（ひろ）ってくれる者は、世にこれらの子弟の他にないのだといふことが平素心の底にないからであります。もしこのことが平素心の底流となつてゐるならば、たとい鼻汁（はなぐし）を垂らしたいたずら盛りの子らに対しても、真実の答礼をせずにはおれないはずであります。礼は教育者と生徒との間にあつては、まさに道の授受そのものと言ふべき意味があります。ですから真の答礼は、形の上からはとにかく

少なくともその心持においては、まさに仏に対する礼拝と相通ずるものがあるべきであります。この礼拝としての答礼によつてのみ初めて生徒の中に眠つていた仏性も次第に目覚めずにはいなくなるのであります。

■道の授受は「死」を覚悟しつつ

このように真実の教育は常に教育者自身が自分の死を自覚し、死後を考えるとこから生まれるものであります。もし教師の一言一句の背後常にこの自覚が存したならば、なるほど生徒時代というものは欲（ほ）がありませんから、それほど深刻にも感じないでしょうが、しかし一度世の荒波に揉まれるようになれば、次第にかつての日の先生の教えに気づき初めるものであります。特に一度先生の死に際会して二度と再び直接肉声を通してその教訓に接し得られなくなれば、従来おろそかに聞いてきた言葉の一つ一つが改めて身にしみて感じられるのであります。ここに至つて弟子達は、初めてこの優れた先生の精神を世に広めることこそ、実に自分たちの責任なることに思い至るのであります。この事は近くは松陰先生の死後に、また遠くは孔子、釈迦、キリスト、ソクラテスなど、人類の有する精神的偉人の死後に共通に窺（うかが）われる現象で

あります。もちろん我々凡愚の者としては、これら偉大なる人々には元より及びもつかないとしても、せめて自分の死後かつての日の教え子達の若干が、ありし日の自分の教えを所縁として、人生に対する覚悟を新にする程度の教育は、この二度とない人生を教育の道に捧げる以上、お互いの期すべきことではないでしょうか。では……。 （堺克也記）

私の諦観から生起した宗教観

（微言）

森信三

○ここ数年来、私の身上に継起した一連の事件は、今にして思えば、私をして、真の宗教の一端に触れしめんがための「仏天」の図らいであつたと言ふべきであらう。

○ではかくして得られた「宗教」とは、如何なるものであらうか。一言でいえば「端的に自己を知らしめられた」といふことである。この場合「自己」を「現実」と置き換えても良いが、とにかく、それ以外想念せられた「宗教」なるものは一種の観念的虚構といふべきであらう。○この事はまた換言すれば、我が身に降りかかる一切の苦患は、そのいぢぢが全て然かあるべき絶対必然によつて生起し来たつたとの諦観に立つことだと言つ

でも良い。

○ところで宗教人、とくに真宗とかキリスト教というような他力教的立場に立つ人々のうちには、ともすれば安易に自己を悪人だとする傾向があるが、それらの人々のそうした表現には、いつしかキリストとか親鸞というような宗教的天才と自己とを混同する一種の自己肯定が混入しているかに思われる。

○何となれば人間は、決してそうたやすくは自己を悪人とは思ひ難いものだからである。すなわち人々が自己を悪人とするのは神仏の前に一人うなだれる自己の内観の立場において言い得ることであつて、少なくとも対人的関係の面においては、容易に自己を悪人とは思ひえないものを持つていふと言つてよいのである。

○こうしたことを言うのは、もちろん私自身が、その一人だからではあるが、しかし人間が、そこばくの信念を持ちたればとて、たやすく自己を悪人と肯定できるようなら、信仰などということも、同様にたわやすきものといつてよいであらう。

○人々が信仰を求めながら、容易にそれを得難いというのは、口ではたやすく「罪深い自分だ」などと言ひながら、少なくとも現実の対人的関係の間においては、自分を真に悪人だとは考えていないから

であらう。

○信仰の困難さは、自分に対する悪口や陰口などが真に心から喜べない点にあると言つてもよいであらう。こうした意味からは、かの蓮如の「陰口でなりとも：云々の言葉もたわやすく典型化して受け止めるべきではないとも言えるであらう。

○蓮如のこうした言葉は、おそらくは事の終わつた後からの言であるに相違ない。自分が陰口を聞かれたと言ふことを耳にした直下の感慨がもしそうだとしたら蓮如はいわゆる煩惱具足の人間ではなかつたともいえるのである。

○こうした意味から私にとつて真にピッタリするのはかの聖徳太子の憲法第十条の言葉である。太子のあの御精神から出発して一度は親鸞の前に頭を……の魂の深さに至りえないで、再び聖徳太子の広大なる世界に浮かび上がるところに、日本の一般庶民大衆の真に救われる……すなわち肯定される……大道があると言つてよいのではあるまいか。(昭和31年8月5日刊「実践人」第5号から)

あとがきに替えて

「身代わり」なる教えを拝読して、かつての粗末な教員行に恥じ入る愚生がいた。残された時間を少しでもこの森信三先生のお教えに添ひたいと願う。森信三先生の諦観から発展した宗教論につ

いては、愚生の能力ではコメントできない。読者それぞれに様々な感慨があつていいのではない。僅か40歳を少し越えられたばかりの森信三に今70を越えている愚生が遠く及ばない。凡愚の極みここにあり。(27日二纂)

第129回「かよう会」のご案内

日 時 平成26年3月18日(火)
18時30分～(毎月第三火曜日原則)
場 所 四ツ橋ビル地下1階『会議室』
「電話」(四ツ橋ビル 管理事務所)
06-6531-3686
交 通 地下鉄：四ツ橋線四ツ橋駅下車
2番出口へ。歩30秒
「長堀鶴見緑線」並びに「御堂筋線」
心斎橋駅及び「クリスタル長堀」との
連絡口で直結。
テキスト 森 信三著「修身教授録」(致知出版)
2300円(大きな書店で購入)
3/18質問
4/15忍耐
5/20自修の人
参加費 1000円

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
Email: hij3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushin